フレーベル教育学における「幼稚園」創設の根本理念
ーその目的の主旨についてー

中央大学　岸　信行

はじめに
第一章　幼稚園創設の基礎
　弟一節　ドイツ婦人及び若き女性に対する呼びかけ
　第二節　株式による出資
　第三節　幼稚園設立の主旨
第二章　幼稚園の特徴とその任務
　第一節　母親と子どもとの生命合一
　第二節　児童保育者の養成
　第三節　児童保育者の性格とその仕事
第三章　幼稚園を支える理念
　第一節　幼稚園の目的
　第二節　幼稚園の教育の実際
　第三節　幼稚園を支える根本思想
　むすび

はじめに

フレーベル（Fr.Froebel、1782－1852）の「幼稚園（Kindergarten）」建設は、彼の教育事業のいわば集大成とも言えるもので、その施設創設の偉業は教育史上に消えることなき光を放っている。彼が建設しようとしたその幼稚園は、今日の幼稚園とはだいぶ異っており、それは、単なる子ども預けの施設ではなかったし、予備校のような幼児教育の場でもなかった。

その施設は、母親という存在に対する彼の気遣いから、幼き生命に対するいたわりの念から、そして、なによりも人類を愛する明日への希望と愛情から生み出された、人類の平和な未来を願う、人間生命の養育の施設だったのである。

この発表においては、そのような幼稚園を支える根本の理念について、フレーベルが実際にどの様に考えていたのかを、特にその創設の時期に彼自身が書いた論文を中心に考察してみたいと思う。

第一章　幼稚園創設の基礎

第一節　ドイツ婦人及び若き女性に対する呼びかけ

フレーベルは、彼の幼稚園設立の計画案を、人類一般にとって極めて重要な発明として位置付けた[1]。ルク（J.Gutenberg、1394／99－1468）の印刷術発明 400 年の記念祝典に際し発表し、その計画案は、全ドイツ婦人（Frauen）、若き女性（Jungfrauenl）にとって、最も価植ある、永続的な祝福をもたらす、この記念すべき祝典にまことにふさわしい事業になるであろうと述べ[2]、ドイツの婦人及び若き女性に参加と協力を呼びかけた。

その要請の文書は、1840 年 5 月 1 日付けで、次のように結ばれている。「われわれは、印刷術記念祝典のこの時点において、この技術が幼児期の保育のためのドイツの婦人達及び若き女性達のこの共同の統一的な事業の記録印刷に応用されること以上に偉大な恵み多きことはほとんどありえない、と信ずる。

チューリンゲンの森のルードルシュタットの近くのブランケンブルクにて

フリードリッヒ・フレー‥ベル」[3]。

彼によれば、乳・幼児期の保育は、女性に託されているから、まずは、そのための共通の絆を保育する

女性達の間にしっかりと構築する必要がある。婦人連は、乳・幼児の保育と教育という崇高な義務を実現し、その使命を果たすために、一致団結すべきなのである。そのために必要とする総てのものが、幼稚園の設立によって得られる。

すなわち、フレーベルが創案したこの幼稚園は、婦人達の深い誠実な愛に基づき、子ども達への失われることなき神の信頼に守られ、平安と純粋な人間性を求める精神によって支えられると考えられたのである(4)。

フレーベルによれば、乳・幼児期の発達が人間の将来の全生活を方向づけ、決定づける総ての基礎であるから、その時期の保育と教育が、何にも増して重要なこととなる。従って、その初期の保育と養育に携わる母親の生活と教育の技量が見直されねばならなくなる。そこで彼は、「婦人の生活と幼児期の保育とが全般的に再合一されなければならない」と言い、女性の心情と思慮深い子ども達の世話とが再び統一的なものにならなければならない（muss wieder Einiges werden）ことを強調した(5)。この「母親と子どもの生命合一」という課題に答えることが、彼にしてみれば人生における最も幸福なる贈物となると考えられたのである。

フレーベルは、幼推園という施設を通じて、神の保護のもとに、植物が自然性と一致して育てられるように、高貴な植物であるとも言える人間、人類の萌芽期の子ども達が、神の保護のもとに、自然との一致において教育されることを願った(6)。

フレーベルによれば、「幼稚園」という名称が、その施設が全うしなくてはならない内奥の固有の精神的な内容を象徴的に既に十全に表現している(7)。その意味から、幼稚園は、「神の庭（Gottes Garten）」なのであり、植物が庭で育つ様に子どもが育つ「子どもの庭（Kinder Garten）」なのである(8)。従って、植物の庭に園丁が居る様に、幼稚園の「庭」にもいわば男女の園丁が必要である。従って、そのような子どもの保育と教育に当たる男女の園丁を養成することも、幼稚園の任務として、重要なことであると考えられた。

フレーベルによれは、幼稚園を通じて、幼児期の最初の保育及び教育のために必要な殆ど総ての要求が満たされる、そのような「庭」に於ける子どもの教育は、一般に示され、実際に開始されなくてはならない、そこで、彼は、総てのドイツの婦人連及び若き女性達に向かって、純粋に人間的な信頼に満ちて、その事業に参加するように要請し、次の様に呼びかけた。

「ドイツ的な心情をもって、学齢までの子ども達の生命を全側面にわたって保育するための一般的施設の共同の設立と実施に参加するよう、要請する。われわれは、ドイツ精神をもって、彼女達がドイツ幼稚園の共同の設立と実施に参加するよう、要請する」。

フレーベルは、自己の多年にわたる教育事業の最終的な成果は、正に「天性的に最も純朴であり、最も教養ある、高貴なるドイツの婦人達の多方面にわたる助成的な協力」を享有すべきことに気づいたのである(9)。

第二節　株式による出資

フレーベルは、幼稚園の設立に必要な費用を株式のような出資で賄おうとした(10)。その出資について彼は「さし当りはドイツの女性の、さらには全女性たちの福祉のためのものとなり、さらには、彼女達の子ども達、全ドイツの子ども達、否これらの子ども達を越えて児童一般の福祉のためのものとなり、さしあたりは、彼女達の家庭並びに全ドイツの家庭生活、否全ての家庭生活そのものの平安のためのものとなり、そのことを通じて彼女達の民族、全ての民族、否人類の福祉のためのものとなり、かくて現在及び全将来のためのものとなるであろう」(11) と言っている。

フレーベルによれば、幼稚園事業の目的は、早期の全面的な生命の保育であり、それは、子どもの活動衝動の保育によって実現され得る。すなわち、その事業は、活動衝動を重視する幼児教育に立脚して、そこから生じて来る様々な成果を、より広い乳・幼児教育に役立てようとするものなのである。

幼稚園は、他の類似した施設の模範となるべくして構想されたのであり、それはフレーベルの教育学的な根本思想から生じてきたいわば彼の思索の帰着点なのである。彼は、幼稚園というその模範施設での教育を通して、既に以前から試みていた、遊戯・作業による児童保育を、体系的に行おうと目論んだのである。

その際彼は、「幼稚園」という象徴的な名前をつけることによって、その施設で行おうとする教育内容を、幾分なりとも具体的に予感的に示唆し、直観にもたらそうとした。その理由は、幼稚園創設に際して彼が有していた根本理念を、出来るだけ具体的に提示し、そのことによって、その思想をより多くの人々に理解してもらい、協力してもらおうと思ったからである。そのようにして初めて彼の幼推園創設の理念は現実的なものとなり得るからなのである。

彼が、幼稚園設立の資金源を、株式に求めたのは、出来るだけ多くの人々と共にその事業を始めたかったからであり、とりわけ彼が期待を寄せるドイツの婦人達の信頼を得たかったがためであるとも解釈し得る。現に彼は、株式による出資について、それが信頼に基づいていることを強調し、その出資は「現代をその諸必要とともに認識しかつ将来の種を芽生えにおいて認める洞察深い人間の高潔な心情に基き」、「とりわけ婦人達や若き女性達の誠実な心」に基づいていると言っている(12)。フレーベルは、出資された資金に純利益が生じた場合の配当についても考え(13)、その資金の使い道については、詳細に規定している(14)。

幼稚園の設立当初10ターレルの株式に申し込んだ人数は、155人であり、それは、「高貴なる婦人達及び若き女性達、並びにキリスト教的信仰をいだく児童の友」達であった。この数についてフレーベルは、「たとえこの数が、教育に対するかくも徹底的で一般的な影響をもつこの事業に対して期待された程大きいものではなかったにしても、申し込みが最高の身分から最低の身分に至るまで全ての階層から寄せられたということは、まことに喜ばしい」(15) と言っている。

彼にしてみれば、もっと多くの申し込みがあると予想していたのではあろうが、たとえ数は少なくてもそれだけの反響があったということは、この事業が「洞察と信条に理解されさえすれば、真に人間的なもの、真にキリスト教的なもの及び現在必要なるものとして認識され、かつあらゆる程度の教養をもつ人から要求されるものである」という確信を得る事は出来たのである。

フレーベルは、感情豊かで思索的な思慮深いドイツの婦人達に多くの期待を寄せた。乳児は、彼らの予感している期待と希望とに一致して、保育されることを望んでいるし、また母親達は、そのような保育と教育がいかに重要であるかということを、生活のただ中にあって、心配と苦痛を感じつつ洞察している。乳児は、母から生まれ乳を吸って大きくなるが、その精神的な発達の最初の段階から、子どもの生命が、神的なものと人間的なものと自然的なものに結び付けられて保育されることが極めて大切であることを、フレーベルは洞察した(16)。その全面的な実現の道を、彼は幼稚園の設立に託し、その資金源を、期待を寄せるドイツ婦人及び若き女性の株式に求めたというわけなのである。

第三節　幼稚園設立の主旨

幼稚園設立の主旨は、「幼稚園」設立後 3 年を総て、その運営が思わしくなくなった時、幼稚園の存続と前進のために書かれた『ドイツ幼稚園に関する報告及び弁明』という論文で繰り返し述べられた。フレーベルは、その冒頭において、「まだこの幼稚園についてほとんど知らない人々に分かってもらうために」と前置きし、その事業の成立と課題とについて、もう一度簡潔に述べたのである。

その弁明書によれば、ドイツ幼稚園は、「就学前の子ども達の適切な保育の深刻な必要感から、1840年のグーテンベルクの記念日に、ドイツ人の共同の教育事業として設立された」。それは、個別的な家庭の就学前教育が、時代の諸要求に十分に答え得ていないというフレーベルの洞察に基づいていた。従って、その目的は、「家庭及び社会に必要な援助の手を差しのべること」であった(17)。

ドイツ幼稚園の必要性を、フレーベルは端的に次の二点にまとめた。第一に、国民の下層階級のための託児所（Bewahranstalten）はあるが、それらは、大部分が欠陥施設で、それを補うものとしての施設がどうしても必要となる。第二に子どもを保護する女性の養成に関しては、ほとんど何も行われていない状況であり、その養成の機関を設ける必要がある。結局彼は、乳・幼児教育におけるこの二重の欠陥を取り除くための努力が、ドイツ幼推園設立の主旨だと言うのである(18)。

第一の必要性について、フレーベルは、1840 年 10 月 26 日の第 292 号の全ドイツ報知新聞（Der Allgemeine Anzeiger der Deutschen）に掲載された幼稚園に対する好意的な記事を引用することによって間接的に説明している。その記事は、次の様なものである。「現代の必要からすでに成立している『幼児学校（Kleinkinder＝Schulen）』または『託児所（Kimderbewahr≡Anstalten）』は、なおしばしば、それらの名称が示唆している欠陥に陥っている。前者はすでに学校のごとくに教授している。後者は、家を

留守にして働く親達の労働の時間中、幼児達を脅かす危害から守ってやれば、それでその任務が果たされたと考える。フリードリッヒ・フレーベルは、人々はそれに満足すべきではなく、特に有用な遊びを通して子ども達の活動衝動を覚醒させ、育てるべきことを要求する。この事は、多くの人々が考えるほど必ずしも容易ではない。なぜならば、正に、人々は子ども達の身近にある自然的なものを利用することなく、しばしば人工的なものに手をのばすからである。これにいたる正しい道は、愛をもって学びとられることである。」(19)

フレーベル自身、他の論文で、当時の幼児教育の欠陥を次のように批判している。子どもとの関わり方が悪いために、真に根本的なかつ媒介的な子ども達の世話ができず、幼少時の取り扱い方がいかに誤っていることか、「一部は無知と無分別から一部は軽率から、一部は、女性らしい児童を愛する心の撹乱と麻痺から現れて来る諸現象が、児童の友及び人間の友にとっていかに痛切な、いなしばしばいかに悲痛なことであることか」。また、彼は、当時の幼児教育の現状を嘆いて言っている。「子ども達の生命の発達どころか、それの抑圧と鈍化がみられる。子どもの無邪気で自由な生命の活動の保育どころか、生命の鈍磨がみられる。生命活動の覚醒どころか、それの麻痺がみられる。生命活動の強化どころか、それの弛緩がみられる。こうして、健康への高まりどころか、病弱への屈服がみられることになってしまう。あるいは逆に、不注意な放任を通じて粗野と放縦が養われてしまう」(20)。

フレーベルによれば、乳・幼児教育は、この様な悲惨な状況に置かれるべきではなく、その真実のあり方が探求されなくてはならない。母親達は、真の生命の世話を行いたいと願い、子どもの生命を健全に育みたいと願っている。ところが、当代の生活状態のもとでは、子どもの生命衝動及び活動衝動の真の保育が母親達によって、正しくなされることは、しばしば困難であり、たいていは、全く不可能である。子ども達のこの生命の世話と保育の実現のためには、今やここで母親達に援助の手が差しのべられなくてはならないのである。

そこで、彼は、子どもの本質を尊重し、愛情をもってその生命を全面的に発達させる精神を養うために幼稚園を設立し、それによって、母親に対する全面的な援助を実現させることを目論んだのである(21)。

すなわち、幼稚園という施設は、子どもの本質に対する尊敬と、子ども達の生命衝動及び活動衝動に対する適切なる配慮を十分になし得る、子ども達の早期のかつ最初の指導の一般化のための施設として設立されようとしたのである(22)。それが、幼稚園設立の主旨なのである。

第二章　幼稚園の特徴とその任務

第一節　母親と子どもとの生命合一

フレーベルは、「幼児保育と女性の心情とを分離するのは、悟性のみである」と考える。彼によれば、人類の肉体的精神的存続は、神が女性の心を通して子ども達を保育し、教育することにより、実現せんとしているのであり、そのことは、人の心に深く食い入る深い根拠を有する有益な真理なのである。すなわち、その真理は、すでに原始時代からの歴史が雄弁に物語っている。しかし、この真理に対して外的な生活の事情は、しばしば母親の心情に反し、また幼児の要求にも逆らって、子どもが発達するその多様な、多面的な発展と形成に対して、「巨大なる暴力」として、幼児と婦人達の生活、女性と子ども達の生活との間に不自然なる分離」を設けて来た。

フレーベルは、このような婦人と子どもの生活の外的な力による分離は、かえって神の賢明なる指図であると考える。すなわち、このような分離があるからこそ、人類は、母親、一般に婦人と子ども達との生命合一の大切さ、その重大さに気づくのである。婦人達と子どもとの生命の合一が尊重されず、ないがしろにされているという事実は、その寛大さとその大切さを人々の心に認識させるためには、かえって好都合なことである。すなわち、彼は、子どもの生活と婦人との不自然なる分離は、「神によって自然と人類を通じて与えられた女性の生活と真の幼児教育の根元的な合一を快復せんとする努力が各方面に目覚めるために、もうけられたものである」と解釈する(23)。

フレーベルによれば、ドイツの婦人達や若き女性達は、子どもの本質及び価値に関しては、しばしば正しい予感をもち、幼児期の重大性に関しても多かれ少なかれ正しく予感している。しかし、それにも拘らず、彼らの愛が、阻まれてしまう場合が出てしまう。母親は、多くの場合子どもに対してかくありたいと

希望し、正しい母親の姿を予感しているのに、それが現実の生活状況においては、何かに妨げられ、自己の存在は、予感し知覚した、あるべき存在とは程遠いものになってしまう。母親は、自分が子どもに対して「こうありたい」と願う姿から程遠いことを予感し、その知覚によって、悲痛な感情に遭遇している。

フレーベルによれば、女性の心理、生命の要求から、乳・幼児の教育において母親が「子どもと生命の合一を得たい」と願うのは、自然なことなのである。従って、婦人の心を尊重するということは、この母親と子どもとの「生命の合一」を実現させることであるべきで、そのことが、真の人間を尊重する者の、また、児童を尊重する者の、最大の関心事でなくてはならないということになる。

そこで、彼は生活の要求にしたがって、母親の愛と子どもの必要との間に、それを通じて母親の愛がたとえ間接的ではあれ、弱められずに、なお一層明瞭にかつ決定的に子どもの必要を受け入れるべき第三者としての媒介者が必要になることを強調する。そのような必要性は、既に母親自身が気付いていて、その実現を希望し、その実現を憧憬すらしているとフレーベルは言う(24)。しかし、そのような母親の希望と憧憬は、すべて個別的であるが故に力がない。従って、分離されている母親の希望と願いを合一することが必要となる。すなわち、それぞれの母親の希望を共通の感情と知覚にまで統一して高め、それを実行に移すことが必要となるのである。フレーベルの幼稚園設立計画案は、正にそのような目的実現のための手段と方法を示すために、ドイツの女性、なかんずく母親に援助の手を差しのべようとしたものなのである(25)。

フレーベルは、子どもが誤った教育のために身体的にも、精神的にも極めて良くない状態で子ども部屋から出て来ることを全く望まずに居るような状況を打破して、精神的にも身体的にも逞しく充実して、心情豊かに、純正な感受性をもって高度な教育段階に達して、子ども部屋から現れて来ることを望んだのである。そのためには、保母（Kindermutter）の養成と女性の健全な精神の発達が何よりも大切なことになる。そこで、女性と母親のための教育の施設が、すべての教員養成所（alle paedagogische Institute）やギムナジウム（Gymnasien）、リセー（Lyceen）、大学（Universitaeten）やアカデミー（Akademien）等に先だって必要であると主張されたわけなのである。

第二節　児童保育者の養成

子どもの生命の諸要求が満たされ、健全な教育が母親の手で行われるためには、母親と子どもとの間の媒介的な保育者、特に女性らしい女性の児童保育者達の養成が不可欠である(26)。フレーベルは結局、外的な職業上の仕事すなわち、市民的な・社会的義務と児童の本質の要求との間の媒介の実現を通じてのみ、女性の生活、すなわち、婦人及び母親の生活と幼児との根元的な合一が再獲得され得ると考えた。

しかし、母親と乳・幼児の生活に分け入る保母と女性指導者の役割は厳密に如何なるものでなくてはならないのか。単に母親と子ども達の間に分け入り、その関わりを援助するとは言っても、その具体的な仕事は如何なるものでなくてはならないのか。そのようなことが、明らかにならなければ、母親と子どもとの生活の総てにおいて、保母や女性指導者が媒介することは不可能となるであろう。

母親と子どもとの生命合一を実現させるための媒介施設の必要性が、正にここに主張されることになった。フレーベルの見解では、その媒介施設の必要が、全ての階級及びどの様な生活を送っている人々にも、はっきり現れているのであり、この媒介を獲得し成就することが、教育において、まず解決されるべき第一の課題となるのである(27)。

乳・幼児期の保育を充実させるための媒介には、「訓練を経た女性の指導及び良き助手」が必要となる。また、その役割と任務を明確に規定する必要性も出て来る。そこで、そのような仲介者の役割と任務を明確にするために、保育者養成機関が不可欠となる。更に、その養成機関が正しく機能するためには、子ども達の保育の真の本質と手段とが明瞭に認識され、その応用と実施に心が向けられなくてはならない(28)。すなわち、児童保育者は、その養成の機関を通じて、教育と保育との必要な能力に習熟し、子どもの本質と発達過程を知り、子どもに対する尊敬と愛にまで魂を高め、子ども達の生命の諸要求とそれを適切な保育及び教育を通じて満たすことに習熟しなくてはならないことになる。そして、子どもと接するのに必要な技術的な自然の知恵と生命の世話が出来るように子どもを指導し、かつ取り扱うのに十分な能力を養わなくてはならないことになるのである(29)。

そこで、彼は、総ての階級のために、総ての境遇の請要求に従って、幼児期の女性保育者、指導者及び教育者を養成し、また若干の年齢の進んだ子ども達のために男性の保育者、教育者を養成しようと企画し

た。すなわち、彼らに児童の正しい指導と取り扱い方を教え、母親に幼児保育上の良き助手を、家庭により良き女性の教育者を、託児所及び他の幼稚園に習熟した保母と洞察力のある男性の児童指導者を養成することを計画したのである。そこでは、専門の幼児教育の保育者が熟練した男性の指導者の指導のもとで彼らの将来の職業のために養成されるのである。女性の児童保育者には、自然の世話、特に植物の世話や庭での仕事が課せられた(11)。

そのような教育者の養成を通じてのみ、母親が最善の意志のもとですら子ども達に与え得ないものを与えることが出来るようになり、更に、母親の適切なる保育、すなわち、母親と子どもとの生命の根元的な合一が再び獲得され得ると彼は考えたのである。そのために、幼稚園には、幼児期の保育に携わる母親の要求や希望を聞き、心配と苦慮とを和らげるために、その中間に立つ、女性の児童保育者及び教育者の養成のための課程が設けられ、その乳・幼児教育の全体的な研究が幼稚園の重大な課題の一つとなったのである。

このようなことから、フレーベルの就学前の教育施設（KIeinkinder－Pflege-und Beschaeftigungs-anstalt）は、同時に、女性の児童保育者及び男女の教育者のための養成施設と結び付けられ(31)、それが幼稚園創設の根本精神となるに至った。

彼は、幼稚園という施設を通じて、子ども達の生活の全側両を注意深く配慮し、彼らの活動衝動の保育を充実させ、良き保育を実現させようと考えたのである。

第三節　児童保育者の性格とその仕事

フレーベルは、幼稚園における養成課程で訓練される人々の性質を規定しているが、それは、家庭と施設とを媒介する、両者に関連する複合的な要素を有していなくてはならない。すなわち、子どもに対しては保育的で教育的であり得ると同時に、母親に対しては代役的な性格を有していなくてはならない。従って、彼女達は、家事に際し、必要に応じて主婦に援助の手を差しのべ、母親に代わっては、子どもに関する世話や教育的保育を引き受ける任務を負わなくてはならない。彼女達は、家事の世話と子ども達の世話が十分に出来るように養成され、幼稚園での具体的な仕事の訓練をも受けることになる(32)。

フレーベルによれば、幼児教育に携わる人は、洞察力の豊富な知識の豊かな人でなくてはならない。全体の根本思想を自己の人生思想として認識し、その思想を実践し得る人々が子ども達の教師として任用される。

幼児期の指導のために修養する青年達は、子ども達が、身体的に精神的に要求する総てのものを知り、かつ、その要求を満たす方法を学ばねばならない(33)。彼らは、一日の数時間以上、子ども達と生活を共にし、将来は、実に、丸一日最新の指導のもとに子ども達と接することになる。幼稚園は、一日数時間の作業時間では十分ではなく、丸一日子どもと指導者が一緒に過ごすことを理想とした(34)。ドイツ幼稚園に修養のために来て、幼児の心身の保育実習に携わり、児童と接しながら、幼児教育の理論を学んだ女性の数は、少なくなかったのである(11)。

幼稚園における保育と教育の具体的な方法は、遊びと遊戯とであった。従って、その施設の始まりは、「保育と作業と遊びの施設（Pflege-Spiel-und Beschaeftigungsanstalten）」という名称がつけられていた。ドイツ幼稚園は、より良き幼児保育を共有財産にするために、適切な遊具、すなわち、子どもの段階的発達と人間の本質に基づいた適当な遊びやその方法を研究しそれを公開し、普及させることも、その大きな目的であった(36)

(そのような幼稚園の研究の成果として誕生したのが『母の敬と愛撫の歌（Mutter＝und Koselieder)、1844』であった。それは、幼稚園の教育的意図を十分達成させるための生命の養育の書であった。なお。その書を貫く哲学的な意義については、1987 年 8 月、明星大学で開催された第 5 回ペスタロッチー・フレーベル学会において口述発表し、○○年、○○月刊行のペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第○○号に掲載された P.～P.)

フレーベル自身が言っているように、ドイツ幼稚園は、作業施設、教育施設および陶冶施設の本質を自らにおいて統合し、かつ形成することを通じて、徐々に、その本来の目標に近付こうとするものであった。

それは、既にある古きものと新しきものとを一個の全体に融合する、教育における統一の仕事を意味し、類似の施設のための実習施設及び模範施設になることを意図していた。すなわち、その施設は、総ての見学者が直接的に、遠くに住んでいる人々は、文書を通じてというように、必要のために助言を求める人々には、十分なる回答が用意される施設、乳・幼児の教育目的実現のために必要とする教養をその必要とする個々人に十分に与え得る施設となることを意図していたのである(37)。

こうした、幼稚園の多様なる目的を達成させるためには、教育における希望を語り、将来における人類の進歩等を語り合う必要がある。また、各地に成立し始めた幼稚園を把握し、一般的ドイツ幼稚園と結び付けるための情報が必要となる。そのためにも、一般的な報告手段としての公刊雑誌が必要となると考えられ、そのような雑誌が出版されたのである。

フレーベルの考えた幼稚園は、児童保育のための模範施設、男女の児童指導者のための実習施設であり、適当な遊びと遊び方を普及させる施設でもあった。また、熱心に子どもを教育せんとする全ての親達、とりわけ母親達と教育者達とに、幼児教育についての考え方を深めてもらう機会を提供する施設でもあった。すなわち、彼は、幼稚園から雑誌を発行し、実際に行なわれている幼稚園の教育の諸問題について、その雑誌を通じて、論じ合おうとしたのである(38)。従って彼が構想した幼稚園という施設は、全体的な幼児教育の模範的な統合的な総合施設を意味していたと言えるであろう。

第三章　幼稚園を支える理念

第一節　幼稚園の目的

フレーベルは、時代が要求するものは、教育を通じてのみ勝ちとることができると考え、幼年時代は、最も可塑性に富む可能性の時期であるから、その時代を細心に保育し、教育することが何にも増して重要なことであると主張した。

フレーベルは、幼稚園創設に関する新聞記事を引用して、当時、ドイツ幼稚園の計画の理念が一般に承認されつつあったことを強調している。その新聞記事の一つは、1840 年 6 月 21 日付けのライプチッヒ一般新聞（in der Leipziger Allgem.Zeitung）第 173 号の冒頭に述べられた記事であり、それによれば、幼稚園において「幼児期の最初の保育及び教育のために、いわば男女の園丁を養成することが実現され得るであろう」と述べられている。二番目は、1840 年 7 月 16 日のライプチッヒ報知新聞（im Leipziger Anzeiger）の第 198 号冒頭の記事である。その記事では、幼稚園の設立を「より持続的にかつ固有の生命を通じて効果的に、民族の精神生活を新しい力を通じて発展させ、向上させる記念碑である」と評価している。そして、その末尾には、更に「われわれは、フリードリッヒ・フレーベルに発するこの理念の真理を確信するものであるので、我が同胞市民をもそれに注意させないではいられない。なぜならば、この理念がここでもまた高貴なる婦人達や若き女性達の心の中に共鳴を見いだすであろうことは、ほとんど疑い得ないことだからである。われわれは、このことが十分満足すべき程度にそうであり得ることを、児童界のために心から希望する」と書かれている。この二つの新聞記事は、両方ともドイツ幼稚園の思想の重要性を承認する書き方がされており、その将来に対する期待が述べられている。また、1840 年 6 月 4 日の全ドイツ報知新聞、第 151 号ではフレーベルの幼稚園事業が、人間教育という真意にかなった事業を促進させ、その自覚によって、ドイツの婦人達に有益な結果をもたらすであろうと評価されている(39)。

フレーベルは、同上、全ドイツ報知新聞、1841 年 11 月 25 日付第 323 号と同 325 号に掲載されている「プランケンブルクにおけるドイツ幼稚園と女性児童保育者の養成施設」と題する論文に、ドイツ幼稚園の幼児保育の全目標が、要領よくまとめられていると指摘している。それらの記事は、皆ドイツ幼稚園に好意的であり、賛同的であり、幼稚園は、設立一年目にして、かなりの反響を呼んだことが伺える(40)。

フレーベル自身は、幼稚園の全体的な究極的な偉大な意図を次のようにまとめる。「人間を早くから行為、感情及び思考を通じて、彼の本質とその境遇に全くふさわしく人間の天性にまで、かくて真の神との合一にまで、かくて一般的には全面的な生命の合一にまで教育することである」(41)。すなわち、彼は、子ども達の活動衝動を、純粋な児童の本性の発達と形成、陶冶と顕現を通じて教育することを幼稚園の目標にしたのである。それは、神の本性に従って子どもを神の性にまで、一般的な生命の合一にまで教育することを意味していた。

従って、幼稚園教育を促進する総てのものを、その教育事業全体の領域において、「子どもを神の性にまで教育する」という観点に結集させ、統一しなくてはならなかった。そこでは、神性の教育に与る、総てのものは有益であり、意味があり、それ以外の一切のものは無意味で、無意義なものとなる。そのような、無意味な無意義な如何なるものも幼稚園には存在することは許されない。すなわち、幼稚園においては、高次なる生命の統一に対する関係が、客観的事物として子どもを取り巻くものにおいても、子どもと共に生起するものにおいても、総ての関係において、決定的にかつ明瞭に現れなければならなかった(42)。

従って、フレーベルは幼稚園設立の目的を次のように規定した。「全ての曖昧なもの及び不確かなもの、かくて破壊的にかつ有害に働くものを少なくとも最初のかつ早期の幼児期の保育から遠ざけ、かつそれを最も純粋なる思考の諸法則において確立するとともに、大筋の歴史及び啓示におけると同様に自然においても現れている永遠の諸法則に従って確立することである」(43)。

フレーベルによれば、幼稚園の目的は、単に学齢前の子ども達を監督するばかりではなく、彼らにその本質全体にふさわしい、活動を与えることでなくてはならなかった。すなわち、子どもの身体を強化し、彼らの感覚を錬磨し、目覚めつつある精神を生き生きと働かせるようにし、子ども達を用意周到に自然と人間界に習熟させ、特に心と心情とを正しく導き、全ての生命の根源にまで、その根源との合一にまで導き、最終的には、生命の合一にまで導くことが、幼稚園の目的でなくてはならなかったのである。

第二節　幼稚園の教育の実際

フレーベルによれば、ブランケンブルク市参事会が、幼稚園のために、庭および遊び場のための空間と、一軒の家屋を提供してくれたので、幼稚園は、その設立の日から実際に始められた。そこでは、フレーベルが中心になり、ミッデソドルフ（Middendorff）が支援し、子ども達は、その本性にふさわしい方法で一日のうち2時間、夢中になって活動した。そのような幼稚園の実際の活動に共鳴した市民達は、彼らの子ども達を信頼に満ちてその施設に送ってくれた(44)。

幼稚園の集団の生活において、子ども達は、皆、未熟ながら楽しく作業し、共同的に、仲睦まじく、その内面的な生命の動きを外部に形成し、その能力を鍛えた。そのような子ども達の生命の陶冶は、単に屋内でなされたのみならず、屋外においても、庭での仕事やそこに植えられた植物などの世話を通してなされ、また、より大きな自然と接する楽しい散歩においてもなされた。

子ども達は、そのような幼稚園での指導によって、子どもらしい予感と直感の力を強め、その感情を豊かにし、精神や身体を強くし、良き習慣を身につけることができた。

幼稚園の遊び場では、年少の子ども達と年長の子ども達が仲良く活発に遊び、そのような遊びは、教育的な作用を営みつつ、子ども達を一つにし、彼らに美しい心の融和を生み出した(45)。

幼稚園では、子ども達によって、どのようなものも生命を得、模造されないものはなく、自然のものであろうと、人工のものであろうと如何なる対象も、人々の心を楽しませる美の形式に組み合わされた。子ども達は、積木を始めとする象徴的な遊具で、たちまち家を作り、砂漠に泉を生じさせ、川に橋をかけ、庭に花をさかせ、空に星をちりばめる。そして、合図によって、それらの創造物は、それが生じたのと同じような早さで、すぐに消滅する。そのようにして、積木を始めとする道具は次の遊びの日までしまわれることになる。

子ども達は、積木で造形的に表現した美の形式を、今度は、自分達の身体の動作による造形的なやり方で表現しようとするようになる。それが、運動遊戯である。すなわち、子ども達は、身体の運動を通じて様々な部分と全体との調和を表現する。例えば、いく本かの花弁が統一されて花になるように、いく本かの光線が統一されて光になることを彼らは、その身体の運動を通して素現する。また、自分達の身体で、王冠を表現し、かたつむりを形作り、花輪を作る。そのようにして、子ども達の身体の諸力は訓練され、それが同時に美しい、礼儀正しい態度の陶冶にもなっていく(46)。

幼稚園での子ども達の生活は、思索的で創造的で、協調的・融和的であった。それは、見学に来た子ども達にとっても、極めて魅力的なものであり、彼らは、たいていは直ちに信頼の念をもって最も引っ込み思案の子どもでさえも、この新鮮な活動に快活に熱心に参加した。そこでは、皆が一つの家族のように結ばれ、楽しい時を過ごすことが出来た。その意味から、フレーベルは、「家族幼稚園（Familien-Kidergarten）」という言葉を使った(47)。

幼稚園では、強制と罰とによらない、自発的な子ども達の活動衝動が重んじられたが、それでいて、子ども達の間には、静寂と秩序が保たれた。フレーベルによれば、その幼稚園の雰囲気は、根底に理念があるからなのであり、多くの人々の目には、さほど重要ではなく、ただの戯れ事のように感じられるかも知れない子ども達の遊戯は、その根底に、実は、時代が求めている人間性の全必要性、諸要求とを全て満たす、深い意義が存しており、それこそが、教育の重要な核心だとフレーベルは言うのである。

すなわち、幼稚園の理念は、子ども達の幼い胸の中の神的なものの萌芽を守り、心と性格を最も高貴なるものへと方向付け、意志と行為力を最初の発端において善なるものに高め強める理念なのである。そして、その理念こそが幼稚園の目指す目標にほかならなかったわけなのである(48)。

それは、ちょうど植物が庭で天の祝福と園丁の注意深い世話のもとで健全に繁茂するのに似て、子ども達は、幼稚園という「庭」で、保育者に見守られ、全面的にかつ楽しく遊び、全ての能力を訓練し、そのことを通して陶冶され、無邪気な明朗、融和及び敬虔なる子どもらしさを表現するようになる。それは、将来の生活、学校への段階を充実させるために、その発達段階を充実させる「生命の合一」を経験させ、精神を高めることを意図する活動だったのである。

第三節　幼稚園を支える根本思想

フレーベルによれば、人々は、生まれたての子ども達の身体的な面での配慮は、例えば、種痘をすることによって、天然痘から守るように正しい保護をしてきた。しかし、彼らが生まれた直後から、無知、下賤、不道徳に委ねられるだけならば、その生は、当の子どもに損失をもたらすばかりか、国家にとっても人類にとっても大きな損失となってしまう(49)。

フレーベルは、人類は一つであり、かつ一つであるべきであるから、人類が精神的に一体となって知性と道徳的・宗教的完成へと向かわなくてはならないと考えた。すなわち、人類は、調和ある進歩を遂げるために、成長しつつあるその段階において、確固たる教育原理に従って、その教養を完成する必要があることを主張し(50)、そのためにも、その土台となる乳・幼児期の教育が根源的に重要であることを主張したのである。

フレーベルによれば、人間の保育は、子どもの生命衝動、造形的・創造的な活動衝動の保育から出発して、心身の全面的な発達を促す方向へと発展するものでなくてはならない(51)。その際、保育する者は、子どもと共に生活をし、共に遊戯するなかで、子どもの活動衝動の陶冶を通して、自然と神との生命を予感することが出来、忘れていた生命の純粋さと感情の瑞々しさを取り戻すことができる。従って大人達が子どもと共に時間を過ごすということは、単に子ども達のためだけではなく、大人自身のためにもなるわけなのである。

遊びに進んで参加する年長の子ども達の作業は、本質的に有効であり、それは、母親、父親にとっても有効であるとしてフレーベルは言っている。「その作業の精神は、実に、より良き人間の覚醒あるいは純化、強化に向けられている。言葉や姿のなかで、行為や愛のなかで、灼熱している生命の火花、敬虔な感情の火花が、どうして、あちこちで感受性に富んだ人々の心情に、二度と燃え立たないことがあろうか。かくも楽しく快活に活動している子ども達の光景が、心を晴やかにし、攪乱されていない無邪気さを見ることが、道徳的感情を覚醒し、熱くすることは間違いない。悟性は、思慮深い作業において幼児の適切な取り扱いのための指針をも発見する。また、遊戯的活動において自己完成のために努力している一群の喜びにあふれた子ども達が与える感銘深い印象は、きっと年長者の心に、自らの模範を通じて子ども達に正しい道を示そうという美しい衝動を活気づけるであろう」(52)。この連関において、「われわれは、われわれの子ども達に生きよう（Laesst uns unsern Kindern leben！）」(53) という彼の根本思想が生じて来る。

「幼稚園」という施設を実施する、その具体化の理念として、フレーベルが一貫して主張したものは、彼の教育学の根底に存する根本思想にほかならなかった。そして、彼にとっては、その思想こそが、人間生活の純粋な感情及び明晰な思考として表現されるべきものであり、更には、直接に行為として、信念をもって表明されるべきものだったのである。そのようなフレーベルの思想とは、「全ての生命の統一根拠は神である」という信念であり、「神は人間の父であり、人間は神の子であるから、神の子として生きる努力をするべきである」という思想なのである。

彼は、「幼稚園」の出発点にも、その中心点にも、またその到達の点においても、その同一の根本的な思

想を据えた。すなわち、彼にとって、その一つの思想こそが、そこから出発し、そこに立ち戻る彼の教育学の全ての方向と内容を規定した、総ての思索の源泉根拠だったのである。その思想は、彼の教育学的体系の総てを秩序づけ、基礎づけ、その全体に生命を与えた「生命の合一」の思想であり、その理念が美しく結晶した成果が「幼稚園」にほかならなかったわけなのである。

む す び

フレーベルは、幼稚園の事業を推進させて行くことを、「ドイツの家庭生活の真価を実証する国民的事業」と呼んだ。彼によれば時代が待望し、希望しているものを実現し得るか否かは、萌芽の段階である乳・幼児期の教育の成果にかかっている(54)。

フレーベルは、乳・幼児教育のために、ドイツ幼稚園を創設し、全力を傾けてその普及に努力した。そのために、創設当初から遠近の諸地域に、大きな反響を呼び起こし、幼時保育並びに、子どもの最も初期の教育に対して多大なる影響を与えた。彼は、その施設が、更に一般的になることを欲し、事実その施設は、次第に発展する兆しを見せたのである(55)。

しかし、経済的には、十分ではなく、カイルハウ学園と同様(56)、財政的な窮乏に陥ってしまった。フレーベルは、献身と愛とをもって、わずかの報酬もなしに、ただ、この事業に対する尊敬と熱意からのみ、それまでに子ども達に行なってきたのと同様なる教育を続けた。しかし、有能な保母の報酬を支払うことはどうしても困難となってしまった。

加えて、彼の壮大な幼稚園の思想は本当には理解されることはなかった。不幸なことには、政治的な嫌疑をかけられ、突然 1851 年 8 月、プロイセン政府は、「幼稚園は、社会主義的無神論を有する」として、幼稚園禁止令を全国に発布し、隣国のザクセン政府もプロイセン政府にならい、発展する幼児教育の揺籃を弾圧したのである。

その不当なる禁止令は 1860 年にようやく解かれたが、フレーベルはその禁止令が解かれるのを知らぬまま、禁止令の発布された翌年の 1852 年、6 月 21 日、禁止令取り消しを求める運動の最中、70 歳の生涯を閉じたのである。

フレーベルは、幼稚園設立の理念のために生き、その理念のために死んでいったと言っても決して過言ではないであろう。幼稚園創設を実現させたその理念は、幼児教育の父としての、嵐の生涯とも言うべき彼の生活を支え、教育哲学者としての彼の精神を一貫して貫き、教育実践家としての彼の仕事を遂行させて行く根底の原動力となった。世界で初めての幼稚園を生み出したその理念は、正にフレーベル教育学の中心思想を形成したその根本の理念そのものであったとも言い得るわけなのである。

注

1 ） Vgl., Fr.Fröbel, Plan zur Begründung eines Kindergartens, vom Jahre 1840 und Rechenschaftsbericht vom Jahre l843. in : Fr. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften h.v. W. Lange Abt. 2, 1862 u. 1966, S.456－483（なお,この論文は、二からなるものなので，前半 p.468 までを PDK.と略記し，残り後半の論文を RUJ.と略記する）．邦訳は、岩崎次男訳「幼稚園設立および実施のための計画案」(『幼児教育論　フレーベル』，明治図書、1972－1976 所収）と『フレーベル全集　第 5 巻』第 24 章「1840 年の幼稚園設立計画ならびに 1843 年の弁　明書」（小原国芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』、玉川大学出版部，昭和 52 年、p.100－140.）を参照して訳出した．以下には、原書の頁数のみ示す．Vgl,,PDK. S.468.

2) E. Hoffmann は、Fröbel Ausgewählte Schriften, Kleine Schriften und Briefe. 1952－1964 において、この論文の正式な題名を上げている．≫kommt, läßt uns unsern Kindern leben ! 《Ent wurft eines Planes zur Begründung und Ausführung eines KINDER－GARTENS, einer allgemeinen Anstalt zur Verbreitung allseitiger Beachtung desLebens der Kinder , besonders durch Pflege ihres Tätigkeitstriebes. Den Deutschen Frauen und Jungfrauen als ein Werk zu würdiger Mitfeier des vierhundertjahrigen Jubelfestes der Erfindung der Buchdruckerkunst zur Prüfung und Mitwirkung vorgelegt.

3）PDK., S. 468.
4）Vgl., RUJ., S. 471.（この書の正確な題目は、Nachricht und Rechenschaft von dem Deutschen Kindergarten,1843.である）.
5）PDK., S. 457.
6）Vgl.,a.a.0., S. 460.
7）このことについては、1987 年の関東教育学会において、つぎの題目で口述発表を行なった。「フレーベルにおける『庭（Garten)』の教育学的意義－自然における『生命の養育（Lebensp 鰯 ege)』について－」。
8) Vgl., Fritz　Halfter, Fr. Fr6bel ; Der Werdegang eines Menschheiterziehers. 1931. S. 238－239.
9）PDK., S.460.
10）a.a.0.,　S.463.
11）a.a.0., S.464.
12）RUJ., S. 471.
13）Vgl., PDK., S.466.
14）Vgl., a.a.0., S.465.
15）RUJ., S.474.
16）PDK., S.460-461.
17），18）RUJ., S.469.
19）a.a.0., S.473.
20）Vgl., PDK., S.457－458.
21）Vgl., a.a.0. ,　S.461.
22）Vgl.a.a.0., S.464.
23）PDK., S.457.
24），25）Vgl., a.a.0. ,S.459－460.
26）Vgl., a.a.0., S.458.
27）Vgl., a.a.0., S.458.
28）Vgl., a.a.0. ,S.459
29）Vgl., a.a. 0.,S.461.
30）Vg., a.a.0. S.,462.
31）Vgl.,a.a.0.,S.461.
32）Vgl.,a.a.0.,S. 459.
33），34）Vgl, RUJ.,S.481.
35）a.a.0.,S.478.
36）そのような幼稚園の研究の成果として誕生したのが『母の歌と愛撫の歌（Mutter＝undKoselieder），1844』であった。それは，幼稚園の教育的意図を十分達成させるための生命の養育の書であった。なお、その書を貫く哲学的な意義については、1987 年 8 月、明星大学で開催された第 5 回ペスタロッチー・フレーベル学会において口述発表し、1989 年刊行の学会紀要『人間教育の探求　第 2 号』に掲載された(P.45～P.61)
37）Vgl., RUJ., S.482
38）Vgl., a.a. 0., S.470
39）a.a.0., S.472.
40）Vgl., a.a. 0., S.474.
41）PDK., S.462.
42）Vgl., PDK., S.462.
43）a.a.0., S.460.
44），45）Vgl., RUJ., S.475.
46），47）Vgl., a.a.0., S.478.

48）Vgl., a.a.0., S.476
49）Vgl., a.a.,0., S.474
50） Vgl., Fr. Fröbel, Erneuung des Lebens fordert das neue Jahr1836, hrsg. v. E. Strnad. , 1933, in : Fr. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, h. v. W. Lange Abt. 1, Bd. 2, S.499－561. 邦訳「1836 年は生命の革新を要求する」、前掲『フレーベル全集　第三巻』, 玉川大学出版部、昭和 52 年、p.572－630. 参照、なお、フレーベルのこの論文については、次の論考で取り上げた。拙稿「フレ　ーベルと生の哲学－生命革新としての『生の若返り』の教育学的意味－」、中央大学論集編集委員会,『中央大学論集』第 4 号、(p.39－60)、昭和 58 年 3 月、所載。
51）拙稿「フレーベル教育学における幼児教育の哲学的基礎－「労作教育の原理を中心として－」、前掲『中央大学論集』第 6 号（p.39－56)、昭和 60 年 3 月、所載、参照。
52）RUJ. S.479.
53）Vgl. , PDK. , S.468. 彼のこの板木思想については、主として、『人間教育（Menschenerzieiehung, 1826）を中心に次の論考で考察した。拙稿「フレーベル教育学の方法理論－おとなと子供の関係を中心として－」、『関東教育学会紀要』第 4 号（p.1－12)。
54）RUJ. , S.,483
55）Vgl.,a. a. 0., S.480
56）拙稿「カイルハウ学園創立期における『フレーベル教育集団』の結成とその苦悩－学園の危機的様相と構成員相互の交渉－」、中央大学教育学研究会,『教育学論集』第 24 集（p.91－124)、昭和 57 年 3 月、所載, 参照。